

潰瘍性大腸炎

大腸に原因不明の炎症が起きる、患者数が増え続ける指定難病
根治治療はないが、炎症を抑える新薬や治療法が登場

若い世代の発症が多いのも特徴
治療は寛解状態の維持が目標

潰瘍性大腸炎は、大腸に炎症が起きる原因不明の慢性疾患です。大腸や小腸などの消化管に同じように炎症が起きるクローン病とともに炎症性腸疾患（IBD）と呼ばれ、難病に指定されています。厚生労働省の統計では国内に22万人以上の患者さんがいます。ちなみにクローン病患者は約7万人おり、IBDとしては30万人の患者が国内にいとされています。

最も多い発症年齢は男性が20〜24歳、女性は25〜29歳であり、中学生や高校生で発症するケースも多々報告されていますが、近年では60歳以上で発症する報告も増えてきており、年齢を問わない病気になってきています。

潰瘍性大腸炎の主な症状は、腹痛や下痢、軟便、血便などで、QOL（生活の質）が大きく下がってしまうのが特徴の一つです。下痢の症状が

ひどく、1日に20回以上トイレに駆け込んだ経験のある患者さんの例もあります。また症状が悪化すると、体重減少や発熱などの全身症状を引き起こすこともあります。

食生活や腸内環境の変化、免疫システムの過剰反応などが原因の一つと考えられていますが、特定されているわけではありません。また、現在のところ完治させる治療法は見つかっていないため、適切な治療により「寛解へ導く」こと、そして、適切な治療を継続することで再燃をコントロールし、「寛解を維持する」ことが治療の目標となります。

新薬の登場で治療成績が向上
腹痛や下痢が続く場合は専門医へ

潰瘍性大腸炎の症状は個々の患者さんによって多様であり、他の消化器疾患と似た症状も含むため、比較的診断が難しい病気です。診断は、厚生労働省が発行する「潰瘍性大腸炎・クローン病診断基準・治療指針」に基づいて行います。具体的に

は、血液検査や便培養、内視鏡検査の所見や病理学的な所見にて診断します。当クリニックの内視鏡検査では、おなかの張りを抑えるために炭酸ガス送気装置を用いたり、鎮静剤を使用したりして患者さんの負担を軽減し、苦痛のない検査を実施しています。

潰瘍性大腸炎は軽症が6割を占めており、初期治療は「5-ASA製剤（5アミノサリチル酸）」の投与が第一選択となります。錠剤や顆粒、座薬、肛門から直接薬剤を注入する注腸製剤などがあり、患者さんの症状や病変の範囲に応じて使い分ける必要があります。5-ASA製剤にて効果が見られない場合はステロイドを使用するのが一般的ですが、長期間使用することで副作用を誘発することがあり、適切なタイミングでの減量、中止が必要です。

ここ数年のトピックとしては、新薬や新たな治療法が開発され、保険適用も進んでいることです。例えば生物学的製剤は炎症に関与している物質に直接作用する治療薬で、TNFaやIL-12、23などの働きを抑えるものや、リンパ球の大腸組織への侵入を防ぐ作用の薬もあります。また、副作用が懸念される患者さんには血球成分吸着除去療法という治療法もあります。これらの新薬や治療法の登場により、以前は大腸の全

摘手術が必要であった難治例でも手術を回避できる可能性が高まっています。

ただし治療の選択肢は増えてものの、どのような順番で生物学的製剤を使うかなどの決まりはないため、かかりつけ医で治療を進めることがなかなか難しくなっています。また、早期に診断できれば治療の選択肢が広がり、生活の質を落とさないような治療効果が期待できます。下痢を繰り返す、腹痛が長引いているなどの症状がある場合はIBDを疑い、経験豊富な専門医を早めに受診するようにしてください。

解説します



札幌IBDクリニック
院長
田中 浩紀氏

先生のプロフィールはP00へ

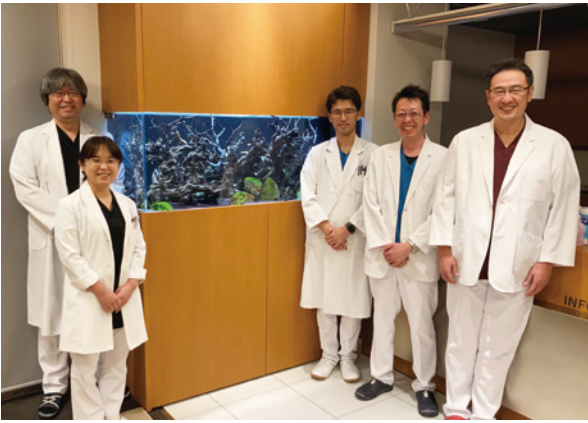
指定難病とされるIBDの専門クリニック 疾患に精通した医師とスタッフが全力サポート

指定難病とされるIBDを専門としたクリニックとして20

20年9月に開院した「札幌IBDクリニック」。IBDとは消化管に炎症が起きる炎症性腸疾患のことで、潰瘍性大腸炎とクローン病を指す総称だ。現在、同院には数多くの潰瘍性大腸炎患者、クローン病患者が通院。田中浩紀院長は「IBDは難病に指定されており、残念ながら現在の医療では完治させることはできません。しかし適切な治療を続けることで、普通の生活を送っている患者さんがたくさん

います」と語る。

診断が難しいIBDのために、消化管造影検査、消化管超音波検査、カプセル内視鏡検査、バルーン小腸内視鏡検査などを導入。苦痛の少ない検査にも積極的に取り組んでいる。また、生物学的製剤の点滴治療や血球成分除去療法などの治療法にも対応。状態に合わせて、オーダーメイドの内科的治療を提案する。田中院長は「症状によって軽い治療で済むケースもあります。異変を感じたら早めに受診してほしい」と訴えている。



受付には院長自慢の水槽を設置。病院らしくない雰囲気で「リラックスできる」と患者にも好評だ



院長 田中 浩紀氏



1999年札幌医科大学卒業。同大附属病院、札幌厚生病院などを経て2020年開院。日本消化器病学会認定消化器病専門医。日本消化器内視鏡学会認定消化器内視鏡専門医。医学博士

内科・消化器内科・胃腸内科

医療法人

札幌IBDクリニック

☎011-213-0397 (完全予約制)

札幌市中央区南19条西8丁目1-18

山鼻ドクタータウン2F

<https://sapicl.com/>

診療時間/月・土 9:30~12:30 14:30~17:00

火・木・金 9:30~12:30 14:30~18:30

※受付は診療終了15分前まで

休診日/水曜・日曜・祝日

最寄りアクセス/市電山鼻19条停留場から徒歩5分、

じょうてつバス「南19西11」停留所から徒歩5分、地下鉄南北線「幌平橋」駅から徒歩15分

敷地内駐車場・近隣にコインパーキング

SAPICL 医療法人
札幌IBDクリニック
Sapporo IBD Clinic

IBD専門 (潰瘍性大腸炎・クローン病)
理事長・院長 田中 浩紀

完全予約制	月	火	水	木	金	土
9:30~12:30	○	○	○	—	○	○
14:30~17:00	○	○	○	—	○	○
17:00~18:30	—	○	—	○	○	—

休診日/日曜・祝日・水曜
※受付は診療終了15分前まで

TEL.011-213-0397
<https://sapicl.com/>
札幌市中央区南19条西8丁目1-18
山鼻ドクタータウン2F

アクセス

- ・市電「山鼻19条」停留場から徒歩5分
- ・じょうてつバス「南19西11」停留所から徒歩5分
- ・地下鉄南北線「幌平橋」駅から徒歩15分
- ・敷地内駐車場/近隣にコインパーキング有